

私の国外体験の履歴書

英語英米文学科 田崎 権一

この小文は出入国にパスポートに捺されるスタンプの日付を手掛かりに、私の過去の国外体験の記憶をたどったものである（自由行動時間には可能な限り大学や心理学関係の建物を訪れることにしていた）。

Hawaii (1992年12月16日～12月21日)

初めての海外旅行は学生引率である。Oahu 島までチャーター便であった。到着早々の歴史講話は時差による睡魔との闘いの時間帯だった。Kanoelani Elementary との交流会があった。アメリカ合衆国の雰囲気 of the University of Hawaii では生協で同僚教員と T シャツを購入した。翌日今度は単独で同大学の Bookstore に行き Ormrod, J.E. 著 “Human Learning: Theories, principles, and Educational Applications” と Best, J.B 著 “Cognitive Psychology” を入手した。“Human Learning” のほうはメタ認知についても言及され、授業や研究で時折活用してきた。大学からの帰路、バス停を間違えた。このことが教訓となり、その後の海外での現地移動では事前確認の上、行動するようになった。

Singapore & Malaysia (1995年12月13日～12月17日)

National University of Singapore へ出かけた。ほとんどの学生がメガネをかけおり、秀才の集まりという雰囲気があった。大学の入口辺りまで行って引き返した。宿泊ホテル近くのレストランで Fish Head Curry を食した。旨い食行動の場所は記憶に保持されやすい。

Malaysia の Johor Bahru へ行き、大きな橋には Singapore への輸出用の大口径の水道管が併設されているのが印象的だった。また、同日に Singapore へ再入国する入国審査を待つ間に目撃した風景が印象的であった。数人前に並んでいたアジア系の人物が審査官としばらくの間大声で口論していた。我々の番では出入国押印だけでほとんど立ち止まらないで通過できた。国際関係が個人に及ぼす風景を垣間見た思いだった。グローバル化や国際事情が変化した約 20 年後の現在はどうであろうか。

Paris & London (1997年12月18日～12月25日)

パリでは、L'Avenue des Champs-Élysées が坂になっているので、クリスマス期の夜に坂下に当たる Place de la Concorde 近くから見るとクリスマス・デコレーションが大きなシャンデリアの塊のように視野いっぱい輝いて印象的だった。Sorbonne の構内 (中庭) に入ると右手に Victor Hugo と Pasteur の大きな像をみた。

Musée de Cluny Musée national du Moyen Âge Paris が近くにあり五感を主題にしたパテスリーが展示されているという事前の知識があったので一人で入館してみた。

ロンドンで印象的だったのは、Marble Arch 駅近くの宿所 Cumberland Hotel 前の Hyde Park にある Speakers' corner である。現在でもニュースで見かける風景で、英語の教科書か参考書に掲載されていた記憶があり感慨深いものであった。私が行ったときには他に誰もおらず芝生の上をリスが跳ねたり近くによって来るのがかわ

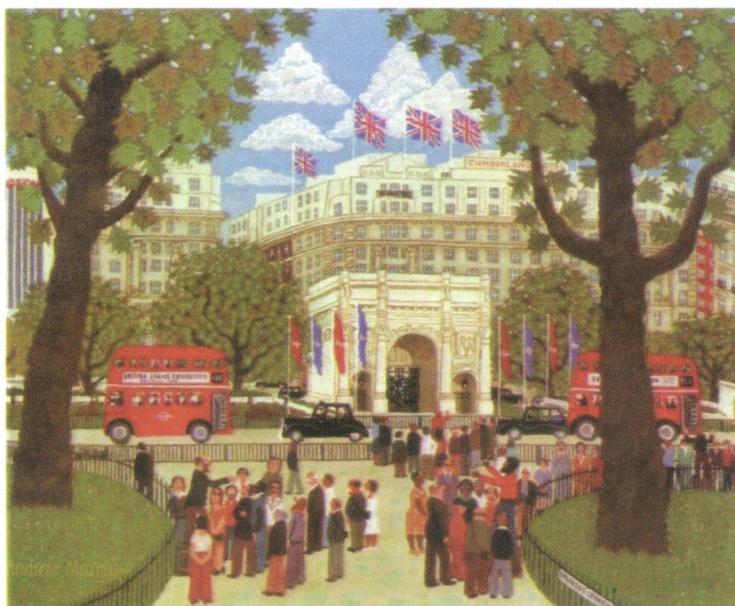


写真 1 Cumberland Hotel の絵はがき (147 × 177 mm)

いかった。私は早朝にホテルの絵はがき（写真）を貰うためにフロントがある 1 階フロアに降りていた。丁度その時に複数の馬の蹄の音が聞こえてきた。早朝の静けさの中、澄んだ響きに対して定位反射的に私は入口方向に目をやった。するとドアのガラス越しに一人の騎馬警官が数頭の馬の手綱を束ねて路上をカポッ、カポッ、カポッと反響させながら軽快に駆けていく風景を見ることができた。それは僅か一分以内、或いはもっと短い時間の出来事であったかもしれない。睡眠により爽やかになった脳が一日のスタート時に、視覚と聴覚の同時的記憶として記録し現在も脳裏に鮮明に保持されている。旅先では早起きすると予期しない地元の日常的だが素晴らしい出来事に出合える。London での自由時間には Freud Museum に出かけた。

Australia (1999 年 12 月 16 日～ 12 月 21 日)

Gold Coast の朝日の日差しは、まるで映画 “Deep Impact” の中で迫りくる小天体のように輝いて、他の建物の窓ガラスに反射した後も衰えない強さのままのように感じた。The University of Sydney の印象は素材が石であるという印象が強く、心理学関係の研究室を探し求めて中に入ってみたが、狭い石階段の通路の途中で迷路の

状況となり諦めて引き返した。丁度、シドニーオリンピックの開催が迫っていたせいか、鉄道駅舎周辺は工事中であった。原産の小さな opal を 1 つ入手した。Aborijie の人々の文化に触れる機会となった。

Paris (2009 年 3 月 21 日～3 月 27 日)

空港や駅ホームでは旅行案内書に警告してある通りにスリらしき人相の人物が登場した。まるで VR ゲームの世界にいるような体験であった。Porte Maillot 近くの Le Meridien Etoile という小さなホテルに 5 泊した。目の前には高層の Hyatt Regency Paris Etoile や Le Paris des Congres が上から見下ろすように建っていた。macaron 製造販売の老舗 Ladurée にも立ち寄った。パリ医学歴史博物館に出かけたときには、丁度昼休みで受付まで約 1 時間待たされた。その間に医学部の廊下に展示してある絵画などを鑑賞して受け付けが始まるのを待った。そのギャラリーで、Wundt が使用した実験機器の一つが陳列されているのに気付いた(本誌「十号」で言及)。その他、La Seine 沿いの古本屋の風景、芸術家らが屯した Quartier latin の Bistro はゆったりできる場所である。朝早く Bois de Boulogne の池のほとりでカモが泳ぐのを見ていると、池沿いや森の道を市民が散歩やジョギングをしていた。観光客に邪魔されたくないという雰囲気があった。一方、Musée du Louvre の前広場へ機動隊がサイレンを鳴らしながら慌ただしく侵入する様子や Aéroport de Paris-Charles-de-Gaulle において銃装備の兵士がゆっくりとした足取りで我々の直ぐ目の前を巡回する風景には緊張した雰囲気があった。Paris 出発の朝、空港へのリムジンバス停車場がホテル前の道路の反対側にあり、そこまでポーターの老黒人が我々の荷物を運んでくれた。彼は別れを惜しむような黒人独特の旋律を口ずさみながら荷物を運んでくれ、有難いほどに旅情的な趣があった。

Deutschland und Österreich (2014 年 3 月 15 日～3 月 23 日)

バスで Flughafen Frankfurt am Main から Autobahn を走り Heidelberg に到着した。近くを der Neckar (Rhein 川の支流) が流れ、落ち着いた町であった。ドイツ最古の大学が位置する大学町であることや、哲学の道が印象的であった。折角ドイツ語圏に来たのだからということで拙いドイツ語を試した。最初の夕食のために、ホテル近くから路面電車を Bismarckplatz で下車し、郷土料理を出してくれるレストラン “Zum Guldernen Schaf” を目指して Haupt-Strasse を歩いた。夕方で通りを歩いても薄暗い中で店の所在地が分からず、後片付け中の露天商の老婦人に尋ねると、“Ein hundert Meter...” と教えてくれ、安心して辿り着くことができた。食事後、ホテルへの帰路、立ち寄った古本屋さんは大きく古い建物で、地下から階上まで本が所狭しと並べられていた。流石にドイツ最古大学の所在地である。同じ通りの離れた場所に瀟洒な書店があり店に入ると学生風の客が多かった。私も記念に薄い 1 冊を購入した。ドイツ国内ではその他いくつかの古城も観光した。

Österreich の Salzburg は映画 “The Sound of Music” の物語で有名な土地である。Mozart Geburt Haus や Mozart Wohnung Haus でオリジナル CD 購入時には、“Verstehe” と返答してくれた。Universität Wien で見た正面玄関奥の広場が、翌年元日放映の Wiener Philharmoniker “New Year’s concert” でバレエの舞台となって NHK で放映されていた。その他、Freud Museum、Sachertorte 発祥のホテル、最古のレストランにも出かけた。

この旅行期間中、千代紙の折鶴や兜をバスの運転手やホテルのフロントに手渡し、部屋掃除の人に置いた。Frankfurt am Main から Salzburg までのバス運転手は素直に喜んでくれたように見えた。ドイツの人と和んだ瞬間だったかもしれない。Wien の Ringstraße の電車では支払い方法が分からず、駅の奥の事務所に行っても英語で伝わらなく、無賃乗車になるのは嫌なので、ドイツ語でいろいろ言い換えてようやく支払うことができた。その他、バスの運転手の Gute Reise、帰路の成田空港で Lufthansa の男性 CA からの Alles Gut などに対して、私は即座に反射的に返答できなかった。

結論として、思考のための母語とコミュニケーションのための英語の学習は必須である。海外から帰国するたびに、今度こそ英会話習得をと思うのだが、日が経つごとに次第にその意志が薄らいでいくのである。私には外国語会話の total immersion の経験が無い。私は或る私学の文学部英文科入学を辞退したがその合格通知書を現在も保管している。どちらの進路が適切だったのかと今も考えるが、心理学の研究で英語の論文を読む機会は多かった。

学部時代にドイツ語は大学院入試の準備のために 10 単位くらいを取得したが、大学院での授業は一つを除いてすべて英文であった。古浦一郎先生による発達心理学演習では Friedrich Keinz による言語発達のドイツ語原書をいわば重箱の隅をつつくような精読の授業方法であった。私個人の研究におけるドイツ語との触れ合いは古い文献 2 本を読むだけで終わってしまった。古いドイツ文献はページ数が多かった。現役最後に熊本県立大学文学部に採用されたのを機にドイツ語学習を趣味として再開したが、数十年の空白は大きいようである。

(本学、教育心理学担当 教授)